

ばんけい

教育ほつとにゅーす

かわら版

こ みち
教育の小径

No.208

2026 February

2月号



(一財)総合初等教育研究所参与

北 俊夫先生



今月のことば

でん か ほう とう
伝家の宝刀

代々家宝として伝えられてきた名刀のことです。いざというときにだけ使う、とっておきの手段のことをいいます。「殿下」や「天下」は誤りです。

議論のある授業をつくる

- 近年、議論のある授業が少なくなってきました。議論する力を身につけることは社会人として成長するために大切なことです。
- 日々の授業において議論する場や機会を意図的に設け、議論することの意味と大切さを指導します。そこでは、議論の仕方やマナーを身につけます。

子どもの発言の傾向性

授業中、教師の発問に対する子どもたちの受け答えを聞いてみると、次のようなことに気づきます。

まず、子どもたちの発言が説明や報告、発表など一方向であることです。それらは教師に向かって発せられています。発言の伝え合いがみられることもあります。そこで留まっていて、協働して新しい考えや考え方が生み出されていないことが気になります。

また、子どもたちの意見がからみ合い練り合っていないために、子どもたちの思考や理解に深まりがみられません。学習指導案には「話し合う」と計画されていても、ただ発表しているだけで、話し合うまでに至っていないのです。そのため、授業が指導案どおりに淡々と進行し、平板な授業になっています。子どもたちが口角沫を飛ばして、議論が百出する授業が少なくなったのが最近の授業の傾向です。

自分の考えをもって主張することは日々の授業において求められるだけではありません。議論する力を身につけることは、社会人として、さまざまな人々と多様な考えを調整し、共生しながら生きていくために必要なことです。

授業における議論は子どもの学びに

大きな影響を及ぼします。授業に議論の場をいかに取り入れるか。このことは授業者に求められる重要な指導技術であるといえます。

議論力をつける場を設ける

子どもたちに議論する力を身につけさせるには、授業において議論する場を設ける必要があります。それには必然性や必要性が求められます。

例えば、多様な考えが出され、それらを集約する必要があるときや、二つの対立する考えが出されてどちらかに選択する必要があるときなどは議論を展開しやすい場面です。また、学級として、あるいは個人として「どうしたらよいか」など意思決定が求められるときにも議論すると盛り上がります。

議論を活発に行うためには、いくつかの留意事項があります。まず議論するテーマが明確であることです。テーマに「なぜか」「どちらがよいか」など疑問詞が含まれていると論点が焦点化します。また、一人一人がテーマに対して、考えの根拠になる内容を事前に習得し、自分の考えをしっかりと持っていることも重要です。さらに、議論の仕方や議論する際のルールやマナーを事前に指導しておくようにします。

議論するときには、机の配置を工夫

します。黒板のほうを一斉に向いた講義方式の配置では、互いに顔が見えづらいですから、議論することに向いていません。コの字か口の字の体形にすると、全員が互いの顔を見合いながら発言するようになります。

効果的に議論できるヒント

ここでは、子どもたちが議論することに早く慣れるようにするためのヒントを3点紹介します。

まず、直前に発言した子どもにつなげて発言するよう促します。先の発言内容に、賛成なのか。反対なのか。質問したいのか。ほかの意見なのかを明確にして、意見を表明させます。その内容をハンドサインで示すと、周囲の人は挙手した人の考えの傾向がわかります。教師は意図的に指名できます。

次に、教師は子どもたちから出された意見を板書します。その際、意見の違いなど論点が明確になるよう整理することがポイントです。子どもたちは板書を見て自分の立ち位置を確認することができます。初めにもった考えを修正する子どもも出てきます。

さらに、学級に自由に言える雰囲気をつくることです。子ども同士、子どもと教師の信頼関係の醸成が議論の質を大きく左右します。

今月の記念日

2月1日

テレビ放送の日

昭和28年(1953年)のこの日、NHK東京放送局がテレビの本放送を始めました。「J」OAK-TV、こちらNHK東京テレビジョンであります」が第一声でした。

学習はいかなる営みか

今月は「学習観」について説明します。学習とは文字どおり「学び習う」ことです。「貴重な経験をしたことで大事なことを学んだ」などというように、日常生活において、条件を示されたり、さまざまな経験を繰り返したりすることによって、大切なことを学びとることがあります。

犬にベルの音を聞かせたあとに毎回エサを与えることを繰り返すと、そのうちベルの音を聞かせただけで、犬は唾液を出すようになるというパブロフの実験があります。経験を繰り返すことで環境にあった反応や行動を身につけていきます。これも学習です。

学校での学習は、教師による意図的な働きかけや関わりによって、子どもたちが知識や技能を系統的に学んでいく営みです。近年「学修」といういい方を目にします。「学び」といい換えることもあります。学びの主体者を「学習者」といい、学校においては一人一人の子どもです。授業で取り上げられる教材を「学習材」と表記することもあります。

学習の主体者は子ども一人一人であるという学習観に立つことがまず重要です。これにより、授業を考える軸足が教師から子どもの側に移ります。教師は一方的に教え込むことを改め、子どもが自らの学習活動をつくるよう指導・援助するようになります。

学習は子ども一人一人において成立しています。きわめて個別的な営みです。また、学級全体に目を向けると、一人一人の学習はじつに多様に展開されています。こうした学習に対する捉え方をすることにより、教師の授業に対する構えや姿勢が変わっていきます。



文部科学省の「不登校調査」

文部科学省は、全国の小学校、中学校、高等学校などにおける児童生徒の問題行動・不登校調査を毎年実施しています。令和6年(2024年)度の調査結果が公表されました。

これによると、令和6年度において国公立の小中学校での不登校の子ども数が35万3970人であったことが明らかになりました。これは小中学生全体の3.9%にあたります。12年連続で増加しています。

このうち、小学生は13万7704人で、前年度と比べて5.6%増加しています。これは小学生全体の2.3%(44人に1人)にあたります。ちなみに、中学生の

不登校は21万6266人で、15人に1人の割合になります。

ここでいう不登校とは、年間30日以上欠席した状況を指しています。病気や経済的な理由で欠席した子どもは含まれていません。

不登校の理由について、学校が把握した不登校の主な背景には「学校生活にやる気が出ない」(30.1%)、「生活リズムの不調」(25.0%)、「不安・抑うつ」(24.3%)などがあります(複数回答)。

不登校の子どもが増えている要因には、フリースクールなど学校以外に学びの場が広がったことや、子どもの意思や希望を尊重していることにより、「無理して学校に行かなくてもよい」という風潮が社会に広がっていることがあると指摘されています。



進まない教育のスクラップ

スクラップとは unnecessary なものを切り取って整理することです。対の言葉は「ビルド」で、これは新たなものやことを創設することです。「スクラップ&ビルド」はあらゆる業界において重視される成長戦略の鉄則です。学校教育においても例外ではありません。

学校には、地域のさまざまな人たちや団体などから、子どもの教育に関するさまざまな要望や課題が寄せられます。教育委員会からは新たな課題が要請されます。

これまで学校は「子どものため、地域のため」との思いから、それらをほぼ受け入れてきました。その結果、学校の教育活動や教師の仕事が徐々に膨らんできました。それが教員の多忙化

を生み出しました。「ビルド」が進む一方で、「スクラップ」が十分に行われていなかったからです。

スクラップするとはこれまで実施してきたことを安易になくしてしまうことではありません。スクラップに当たっては、学校や教師でなければできないことか。時代の変化とともに実施の価値が薄まっていないか。他の行事や事業と一体化できないか。地域や保護者に委ねることができないかなどの基準を設けて検討し、再整理します。こうした取り組みは現在進行している学校の働き方改革の趣旨にも合致します。

スクラップするとき、なぜスクラップするのかを校内で十分協議し、みんなが納得することが、新たなもの(こと)を創り出すために重要です。これまで学校の先人が積み上げてきたことをスクラップすることは忍びないことですが、私情を挟まず、英断を下す姿勢も必要でしょう。(H)

INFORMATION

教師のリアクションカ

「指導と評価の一体化」とは何か
「指導と評価の一体化」としての教師の適切なリアクションを具体的な事例をもとに解説!

著者/北 俊夫
定価/1,430円(税込)
発行/株式会社文溪堂
A5判 96ページ



「教育の小径」のすべてのバックナンバーを文溪堂ホームページからお読みいただけます。

お知り合いの先生にもお勧めください。



ぶんけい 教育の小径 検索

編集後記

相手の表情や場の空気が読めないで、オンライン会議が苦手だという声をよく聞きます。しかし暗黙の了解や付度といった日本の配慮を取っ払い、論点を明確にして焦点を絞って議論するようにすれば、よりよい成果が得られるのではないのでしょうか。これは大人も子どもも同じだと思います。(H)



企画・編集: ぶんけい教育研究所
発行: 株式会社文溪堂
発行日: 2026年2月1日